

「ヨハネによる福音書」を読む 第1回 ヨハネ福音書 第1～2章

2009年2月8日（東京 新宿）

奥田 昌道

「天の次元」と「地の次元」 カナでの婚礼 イエスとニコデモ 初めに言があった サンダー！
シング著『聖なる導き インド 永遠の書』 「第四の書 神との対話」 「第一節 信じる者たちに
わたしは永遠の生命を与える」 「第二章 罪と救い」 洗礼者ヨハネの証し 最初の弟子たち
「第一の書 天界の異象 第八章 義者の行末」 「第七章 創造の目的」 「ありがとう」 「第二の
書 霊界物語 第一章 天からの来訪者」 祈り

●「天の次元」と「地の次元」

皆さん、よくお集まりくださいました。ヒルティをずっと2年ほどここでやってまいりました。とても共感するところが多かった。そのヒルティがほぼ終わりましたので、今度は何を皆さんと一緒に学ぼうかと思って、自然に湧いてきたのがこのヨハネ伝を読んできたということ。ヨハネ伝を読むといいますが、それは決して学者のごとく、

「ここはどの説によればどうだ」

とか、そういうことをやる気は全くありません。ですから、一つ一つ順を追ってというよりも、1章なら1章の中で大事なところはここだという、そういうところを皆さんと一緒に深く味わいたいという思いでいます。その意味では非常に独特な読み方をするだろうと思います。

皆さん、ヨハネ福音書を何度も読んでこられましたか？

「いえ、よく読んでいません」

なんてでは困りますよ（笑）。文語訳もとても響きがよろしいですし、新共同訳も親しみやすい。これは全部もとは我々の知らない言葉で書かれていたはずですから、それが翻訳されてこういうふう^{こたわ}に伝わってきている。「原語ではどうだ」とか、あまりそういうことに拘らないでいいと思います。

マタイ・マルコ・ルカの三つの福音書はだいたい共通の地盤の上に書かれている。ベラスになってるのはマルコ伝だろうと言われている。マルコ伝を下敷きにして、それからマタイ伝ができあがり、またルカ伝ができあがっている。

マタイ伝の方はどちらかというと、ユダヤ教の信者さんたちに向けて書かれている。だから、

「旧約聖書ではこうだ。でも、私はこう言う」



「これは旧約のこれこれの預言が成就するためである」とか、非常に旧約との連続性をできるだけ保つような角度から書かれているように思いますが。

それに対して、ルカの福音書というのは、異邦人の伝道に携わったルカですから、あまり、「旧約聖書ではこうだ、ユダヤ教の律法ではこうだ」と

ということをやかましく言わない。むしろ、我々のハートに訴えてくる。異邦人の心に訴えるような書き方です。ですから、例えば「放蕩息子」の譬話たとえばなしにしましても、他の福音書にはありません。それがルカ伝は15章の大部分を「放蕩息子」の話が占めている。それから、キリストが十字架にかかれた時の片一方の盗賊の話もそうです。マルコやマタイ伝では二人の盗賊がさんざん罵ののしつて終っているけれども、ルカ伝の方は、

「悔い改めて、こんなやつが傍そばにいたことを覚えてください」

とキリストに訴えたら、キリストが、

「お前は今日、私と一緒にパラダイスだ」

と言ったというお話が出てきましょ。小池先生は、

「あそこが一番好きだ。自分の墓にはあれを書いてほしい」と言われた。「汝、今日、我と共にパラダイス！」と。

そんなふうには、同じものを下敷きにしなくても、マタイはマタイの独自性があり、ルカはルカの独自性がある。マルコは、ヨハネ・マルコというペテロのお弟子さんだったようですけれども、ペテロが口述したのをマルコが筆記したといわれている。だから、トントントンと非常にテンポよく話が進んでいる。そういうふうには、それぞれの違いがある。

その三つの福音書は「共観福音書」といつて、見方、観点が共通であるという。共に視点、観点、つまり歴史的観点が共通している。歴史的観点といいますが、それは決して新聞記者が事実を報道しているようなものではない。なにぶん古い資料ですし、何十年も経つてからそれが書かれているわけですから結局、印象に残っているものを際立たせるという、そこにひとつのフィクションがある。

「フィクション」というと、嘘うそという意味ではありません。それがより鮮明に訴えられるような——印象派という絵画がありますね——ある所は強い光を出すとか、レンブラントみたいに光と闇が交錯しているような描き方をするとか。写真ですらそうなんです。我々と同じような風景を見えますけれども、その写真を撮る人の心の角度によってそれが違いかたちで映ってくる。すべて同じものを再現するなんてあり得ない。全部、心に残ったものをもう一度再現してアピールしていく。それが目的なんです。科学の本みたいに事実をそのとおりに分析して書いていくということではない。

だから、この共観福音書ですら、福音書を書いた方々の角度により、取り上げ方によって順序が違っていたり、いろいろ食い違いがあるわけです。食い違いがあるから嘘かとい



うと、決してそうではないということをもってほしい。

この共観福音書の三つの福音書でも、既にそこにドラマが展開しています。ドラマは何かというと、「天の次元」と「地の次元」ということ。私たちは地の次元ですよ、この自然科学の世界、社会科学の世界は全部、我々の学問的営みはすべて地の次元です。

ところが、それに対して、この天の次元をもって顕れて来たのがナザレのイエスというお方なんです。だから、イエスというお方は正に地の次元と一つということですよ。人の姿をとりながら、その中に天の次元が宿っているという、極めて困ったお方なんです。理解する上では。理解する上では困ったお方なので、地の次元からこのお方をいくら分析研究して、聖書学でいろんな資料をもとにして「ああだ、こうだ」と言っても、それは全部、本質はつかめない。

このイエスというお方の中に宿っている地的な要素と天の要素がある。その天の次元が切り込んで来ていますから、そこをキャッチできるかどうか。キャッチできない人は、奇蹟があっても、

「あれはうそだ、デタラメだ」

と言うことになってしまう。この共観福音書ですらと申し上げたい。

ところが、ヨハネになりますと、それがもつとはつきりと、ヨハネ福音書はこの天の次元をもつと深く鮮やかに描こうとしている。

「歴史的にどういう順序で何が起こったか」

というのは、これは手段にすぎない。道具立てなんです。だから、私は、ヨハネ伝は正に「戯曲」だと思います。シェイクスピアの戯曲とかありますね。では、戯曲はうそか。そうではない。皆さん、いろいろな戯曲を見て、我々は涙を流したり感動するわけです。何で感動するのだろうか。そこに訴えるものがある。訴えるものは手でつかんだり、証明したりするとかいうものではありませんけれども、それが訴えてくる。

ですから、このヨハネの福音書はシェイクスピア作ではありませんが、正に神さまの霊が人を通してこういうドラマを作らしめた、書かしめられた。そういうふうに割り切っていたらよろしいのではないかと思えます。

戯曲ということになると、この頃のテレビでもそうですね。番組を見ますと、初めに重要な場面が出てくる。それである程度、

「この番組で出てくるのはこんなですよ」

ということをいって、それから番組が始まるでしょ。だいたい、ドラマというのはそうですね。私も好きで、よくテレビも見ている。初めに番組の要点が出てきて、それから話が始まる。そのあとで予告編がある。

ヨハネ伝の第1章は正に序曲です。これから何が始まろうとしているか。

「これから読者の皆さんに訴えたいのはこんなことですよ」



という、プロローグ（序曲）であり総集編でもある。そういう角度からヨハネを見ませんと、初めから、

『初めに言葉ありき』とは、なんじゃこれは？

『言葉は神なり』とは、なんじゃこれは？

ということになってくるでしょ。ところが、その角度から読むと、この第1章の前半で、バーンと「これから訴えようとするこの番組はこうですよ、ドラマはこうですよ」ということを印象付ける。

19節からは、洗礼のヨハネが地上を歩いた記事が出てくる。そういうことで見ていきませんと、ヨハネ伝というのは全然わからない。先入観をぬきにして読む。これは歴史的事実を順序立てて書いているのではない。所々、歴史的なものが出てきます。そういうものが出てきながら、それを通して何を訴えているのか。まさにこの天の次元が地に現れてきて、ドラマを起こしているわけです。イエスというお方の姿すらも、非常に「地の人」として歩いているかと思うと、突然、「天の人」に変貌するんです。

あのサマリアの女に、

「わがうちには汝の知らない水がある。それを持っている私のことを本当に知ったら、あなたの方から、その水をほしいときつと言い出すにちがいないよ」

と言ったら、サマリアの女は、

「なんだこの人は!? 汲む物も何も持っていないのに、井戸は深いんだよ。どうやって井戸の水を汲み上げる気なのかね？」

という、地の次元からサマリアの女はイエスにあい対しましたから、トンチンカンですね。ところが、イエスは、

「あなたの夫を呼んでこい、あなたでは話にならないから」

「いえ、私に夫はありません」

「それはそうだ、あなたには五人の夫がいたが……」

と、素性を明かされると、もうすっかり彼女は驚き、動転しまして、

「あなたを預言者と認めます！」

という、こういうドラマですね。話をしている間に、弟子たちは買い物から帰ってきて、

「はい、先生。お食事ができてまいりました。どうぞ……」

「我には汝らの知らぬ食物あり。わが父の御意みこころを行うこと、これが我が食物だ」

なんて、もう天の人に変ってしまっているわけですよ。

「御意を行うことが私の食物だ」

と言う。食物というのは、人間になくはならぬものです。さっきの水もそうです。食べ物もそうです。それがなくては生きていけない。しかも、食物というのは何よりも欲しいものでしょ。何が何でも絶対に欲しい。ところが、それがこのお方にとっては



「父の御意を行うこと、これが私にとって絶対に必要だ」

という。もうその時は天の次元です、地の次元は離れてしまっている。だから、このイエスという方は、ある時には本当に涙を流したり、腹をお立てになったでしょうし、人間らしく振舞っていたかと思うと、突然変身するんですね。それが弟子には見えないから、完全に戸惑っている。

●カナでの婚礼

イエスのお母さんもそうです。あの「カナでの婚礼」というのがあって、婚礼の時に水を葡萄酒に変えた。あれなんかもうそうです。イエスのお母さんは困ったでしょうね。普通の子だと思っていたら、時々普通でなくなるんですから。あのカナの婚礼は3章に出てくる。

「最初に行われた徴である」

と書いてある。イエス・キリストはカナの婚礼で「第一の徴」をそこでなされた。

「第二の徴」は、王の近臣の息子が病で苦しんでいる。その近臣がイエスのもとにやってきました。

「では、帰れ。汝の息子は生きるなり」

と一言仰ると、もうその時に治っていた。その近臣が帰る途中で、家からのお使いがやってきて、「息子さんはよくなりましたよ」と伝える。「いつだ?」と、時をたどってみると、「帰れ、汝の息子は生きるなり」と、その一言が発せられたその時に治っていたという。これは天の次元ですよ。天の次元では、時間というものを超越して、サツとよくなる。

そういうお話が、サンダー・シングという方の本の中にある。それをあとでご紹介したいと思います。これは最もいい聖書の註解書です。

カナの婚礼でキリストは結婚を祝福しておられる。ちょっとそこを先に見ましょう。イエスとお母さんが招かれておられた。お母さんもイエスさまも一緒に招かれているのは、かなり近い関係にあった二人なのでしょう。宴席の途中で葡萄酒がなくなりました。お母さんがイエスに、

「葡萄酒がなくなっちゃったんですよ」

と言った。イエスはその時、

「女よ、我と汝と何の関わりがあるか」

と、そんなことを言った。もうその時は、地の次元ではなくて、天の次元でイエスはものを言っているわけです。お母さんにしたら、孝行息子が自分の困ったのを見て、

「ちょっと困ったんや、葡萄酒がなくなつたんや!」

と。何でイエスに——葡萄酒は宴会系の役割なのに——息子に「葡萄酒がないんや、どないしよう?」なんて言ったか。お母さんの気持ちからしたら、



「ひよつとしたら、この子だったら救ってくれるかもしらん」

と思っただけでしょうね。何で「葡萄酒がないんですよ」なんていうことを、お客として招かれていた息子のイエスに仰るんだろうかという、そんな思いで皆さん読みましたか。いろんな想像をして読んだらいいんですよ。何でこんなことを仰ったのかと。イエスは、

「女よ、我と汝と何の関わりがある」

と答えられた。そしたら、お母さんは「はっ」と気がついた。

「今言っただけじゃないか、息子だからといって気安く声をかけるべきでない。この子はちよつと違う。おそれいりました」

と、一歩退く。それから召使に、

「この人が言うことは何でもそのとおりにしなさい」

と言いつける。イエスは断られた時に何と言ったか。

「私の時はまだ来ていません」

と言われた。それは「天の時」ですね。「さあ、動け」という上から御声がくるまでは、イエスは自分では動かない。それでしばらくしてから召使たちに、

「水瓶にいっぱい水を満たせ」

と言つて、水を満たさせた。

「さあ、今から汲んで持っていきなさい」

と。召使は料理長、宴会係の担当者の所へ持つていった。料理長は飲んでみたら、

「これはすごい。最上級の葡萄酒だ」

と。それで、花婿の所へ行つて、

「あんたという人はどういう人かね。だいたい、始めにいい酒を飲まして、み

なが酔ってきたら、あとは変なものを出すんだよ。ところが、あなたは最後

に最上のものを出すとは、なんと見上げたことか」

と、花婿を誉めだしたわけですよ。それが「第一の徴」と言われている。

だから、あれなんか、いろいろ想像したら楽しいですよ。イエスはいつ同情してくれたのだらうか。もうピンチですよ。そうでしょ、せつかく宴会の席で葡萄酒で皆さんがいい気分になっている時に、「もつと葡萄酒をちょうだい」、「もうないんです」なんて言ったら、宴会を備えた花婿側の恥ですよ、どろを塗りますよ。イエスもお母さんに呼ばれた時に、それは何とかしてやりたいときつと思われたにちがいない。けれども、

「私の時はまだ来ていない」

と。しばらくしてから、

「さあ、この水瓶に水をいっぱい満たしなさい」

と。召使たちもお母さんから、「この人の言うとおりにしなさいよ」と言われているものだから、「はい」とそのとおりにした。そして、



「さあ、それを汲んで持つていきなさい」

と。水を溜めた召使たちは、これはただの水だということは、自分が汲んできたからよくわかっていたでしょう。けれども、それが最上級の葡萄酒に変わっていた。

だから、神さまのなさることは、一番ピンチの時に、困った時に露あらかに現してくださる。しかも、水はただ同然で、無色無臭、味がありません。水は水としておいしいけれども、宴会で水ばかり飲んでいるわけにはいきません。その天然の水が、イエスの御名によって葡萄酒に、大変なものに変わっている。これが私たちの人生にとっても大事なことはないかと思う。

今は不況でしょ。もう惨憺たる状態です、葡萄酒がなくなっている状態ですよ。人間はこの世の知恵だけでそれを解決しようとする。そのときに、なぜ皆さん、祈ろうとしないのか。葡萄酒がなくなつた。行き詰まった。ここで祈ろうと。

「神さま、あなたの時はまだですか。あなたの時はいつなんですか。我々はおごつていました。何でもできると思っていました。山ほどみんなわかると思っていました」

と。経済学者もみなどの人も。自然災害でも何でもありません。人間が作りだした災害なんです。マネーゲームに躍らされて、アメリカ全体が不況になって、世界中を困らせている。一番の被害者は労働者の方々です。それらを全部ふくめまして、

「神さま、この民は葡萄酒がなくなつてしまった。一番大事な物がなくなつた。人の知恵ではどうにもなりません。あなたの時はまだ来てないのですか。あなたはこれで何かをお示しになっていらつしやるのでしょ、人間の傲慢と高ぶりを。人間は傲慢でした。あなたの時はまだなんですか。どうぞ、現してください」

と、本当に心を合わせて祈つたら、私は葡萄酒の奇蹟が起こると思う。今こそ本当に心一つにして祈るべきことは祈る。その時ではないかという、そんな気がする。

今のは一つの例ですけれども、この聖書は永遠の書です。過去の物語ではない。今の私たちに、

「あなた方はこんなふう生きるんだよ。こんな時にはこうなんだよ」

ということを語りかけてくれているように思う。それを受けとるのは、天の次元のことが語られていますから、天の次元を受けとれる導きが要る。その導きは何かという、聖霊なんです。

● イエスとニコデモ

第3章にいけますと、ニコデモのお話が出てきます。ニコデモは当時の学者です、ユダヤ教のある種のリーダー格、いわば大学の先生です。それが夜こつそり、イエスの所にやって来た。



「先生、あなたのなさっているこんな徴、奇蹟、これは神さまがご一緒でない
と、とても出来るものではありません」

ともちあげた。そうしたら、イエスは何と言われたか。

「人は新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。神の国に入るこ
とはできない」

と。ニコデモは学者ですけれども、地の次元でものを考える。天の世界のことも全部、地の次元で、生まれながらの人間性の中でいろんなことを理解しようとしている。そこから見ると、イエスのやっておられることは不思議でしょうがない。だから、夜こっそり来た。昼来たら、恰好悪いですから。「あのナザレのイエスという変てこな奴の所へわが先生は宮詣で行った。弟子入りする気かいな」なんて言われたらいけませんから、ニコデモさんは夜こっそり行ったところが、

「人、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」

と言われた。ニコデモは、

「もう一回、お母さんのおなかに入るんですか!？」

なんて言っているでしょ。こんな歳としとつてから、どないしてお母さんのお腹なかに入れますか。歳とつてますから、そんなもの入れるはずもない。そのくらいニコデモは動転している。それに対して、

「人は上から、天から生まれなければ、霊によって生まれなければ」

と言われた。「上から、天から、霊によって」はみな共通な一つのことなんです。肉から生まれるものは肉である。お母さんから「オギャー」と生まれて、みんなそれぞれ生長していく。それは必要なんです。でも、そういう人間の一生——まあ百歳までといたしましよ——その人間の一生は地のものですから、生まれてだんだん青春時代の上り坂になって、だんだん皆さんは全部もう峠を越えてここにいらつしやる(笑)。

「それからどこへ行くの?」

と、本気で考えたら、おちおち夜も眠れないはずなのに、みんな気楽な顔をしている。そして「世界経済がどうなった」ということにはものすごく驚かれるんですけれども、

「自分がさしてどこへいくの?」

ということについては、本当に皆さん呑気になさっています。でも結局、地の次元の人間はこうやってピークがきたら、あとは下り坂でどうしようもない。どんな医学でもこれにくい止められない。ある程度修正はできますけれども、この最後のところはどうにもならない。

そういう地の者に対して、イエスという方は天から降くだってきて、そして天から降くだっていく。釣りに引かかった者は、あるいは網に引かかった者は全部、天へ引き上げていく。そういう役割を授かって来られた。これは地の人間にはできっこありませんよ。そうでしょ。



地の人間ができる部分は、地の人間らしく、痛みがひどければスヤスヤと寝られるように、死ぬるようになってしまうでしょうけれども。ところが、そうではなくて、天の次元をもって現れて、そしてそれに出会って、「はいっ」と言つて縁を結ばれた人間をまた天に引き上げていくという役割をしたのがイエスというお方なんです。

そういうことをニコデモに言われたが、全然、ニコデモはわからない。本当にトンチンカンな問答をしている。そこでイエスは言われた。

「風を見てごらん。どこから来て、どこへ行くのか全然わからないけれども、風が吹いていることはよくわかる。音が聞こえるし身体に感ずる。けれども、

風はどこから来てどこへ行くのか誰も知らない」

そういうことをニコデモとの対話で仰つた。そんなふうには、ヨハネ伝で訴えようとしているのは、天の次元が地においてきて人となつておられる。その人の中に地的なものと天的なものがあることも入り交じつて現れる。地の話をしてある程度、話に通じているけれども、天的な話になるともう通じない。そういうことのように思います。

●初めに言があった

それでは、1章の序曲の所を読んでみましょう。文語訳と口語訳と両方で読んでみます。始めに新共同訳から。

「1初めに言ことばがあった。言は神と共にあった。言は神であった。2この言は、初めに神と共にあった。3万物は言によつて成つた。成つたもので、言によらずに成つたものは何一つなかった。4言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。5光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。」

（ヨハネ1：1～5 新共同訳）

文語訳の方で読みますと、

「1太初はじめに言ことばあり、言は神と偕ともにあり、言は神なりき。2この言は太初はじめに神とともに在り、3万よろずの物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらずで成りたるはなし。4之に生命いのちあり、この生命は人の光なりき。5光は暗黒くらきに照る、しかして暗黒は之を悟らざりき。」（ヨハネ1：1～5 文語訳）

この「太初はじめに言ことばあり」ということを、学者の先生方は一生懸命に解き明かそうとしてくださっているけれども、そんな無理する必要はないと思う。ヨハネ伝は、何も学者の先生に向かつて研究材料を与えているのではなくて、「生命を得てくださいね」と言つて書いてある本でしょ。だから、

「太初はじめに言ことばありき」

は、霊なるキリスト——この世の創造つくられる前から神と一緒にいらつしやつた。神さまも霊です——その根源的な根源霊でありたもう神さまと一緒にいた霊なるキリストのこと。



「神さまと霊なるキリストとどんな関係にあるのか。三位一体だ、何だかんだ」と、また議論が始まる。そんな難しいことは考えないで、とにかく神さまは根源なるお方で、その方とご一緒にいられた霊なるキリスト、この霊なるキリストが地上におりて来る。これが主題なんです。霊なるキリストが地上におりて来られる。

「その霊なるキリストとはどんなお方なの？」

「それは神さまと一緒にいると仰った方だよ」

と。「神と共にあった」という。性質は神の性質と全く同じ本質を持っておられる。愛です、生命です。だから、その方に生命があるのは当たり前かたの話です。光なんです、その方はまた。生命であり、光であり、愛である、そういうお方。そのことをこの1章の1節から5節までで言っている。万物の創造主であるわけですよ。その方が愛をもつて万物を創つくる。そういうことをここで言っている。

●サンダー・シング著『聖なる導き インド 永遠の書』

サンダー・シング [Sunder Singh (Sadhv) 1889/9/3 ~ 1929?] インドのキリスト教伝道者」というのはインドの方で、今世紀、日本にも来られたようです。この方は、私の生まれた1932年くらいに亡くなられたのではないかと言われています。殉教されたという説があつて、誰にもわからない。チベットで姿が見えなくなつた。ある人は、エノクのように天上にそのまま往つてしまったのだろうという人もあるし、殉教したのだろうという、いろんな諸説があるけれども、わからない。

そのサンダー・シングは、インドのシク族の非常に厳格なヒンズー教の流れの中で生まれて、お母さんがとても信仰深い方で、サンダー・シングが生まれた時に「この子を立派な僧侶に育てたい」と思つて、特別な教育を施されたけれども、そのお母さんは早くに亡くなられた。それでサンダー・シングは非常に悲しんで、15歳くらいまでに非常にいろいろな苦しみ味わうわけです。やはり自分も僧侶になろうと一生懸命努力するけれども、なかなか行き詰まつてしまつてうまくいかない。聖書を見たら破り棄てる。その聖書を破り棄てたということが物凄く最後までサンダー・シングの心の傷となつて残つたそうです。つまり、そんな聖書を破るような人間は、キリストが救つてくださるはずがないというぐらゐの心の傷になつている。

そのサンダー・シングはついに思い余つて、15歳の頃に、ある寒い夜、「もう、これで本当のものを見出さなければ私は死ぬ」と心に決めて、沐浴もくよくして午前三時くらいから祈り始める。

「五時に一番列車が通ります。それまでに、神さま、あなたが現れてくださらなかつたら、私はもう鉄道自殺します」

と。その夜明け方に部屋の中が明るくなつて、キリストが現れた。それで本当にその時に



キリストを見た。それで一夜にして彼は変わった。そうしたら、周りの者は、「お前はこの頃悩んでいたから、どうせ変な幻でも見たんだろう」と言つて相手にしなかった。今度は、裏切り者と言われて、彼は毒をもられて、旅に出させられる。ところが、そこから助けられたりとか、非常にいろんな苦難を通つて、だんだんキリストの中に深く入っていくという、そういう方なんです。だから、物凄く祈り深い人なんです。何年かのちに、彼は岩の上に坐つて祈つたりして、祈りの中で度々霊界が、天の世界が示される。そこで天使たちと話をしたり、時にはキリストが現れてきてくださつて、キリストと問答したりする。そういう天のビジョンについて彼は人の言葉に翻訳できるところだけ翻訳します。

《とても人間の言葉で天のことは表せない。ごく基本的な初歩的なことだけを、読者に誤解を与えないように気をつけながら、自分の見たこと聞いたことを書き記す》

と書いている。このサンダー・シングの『聖なる導き インド 永遠の書』(林陽訳、徳間書店 1996年6月刊)は本当に納得しますよ、なるほどと。その中から若干ご紹介したいと思います。

●「第四の書神との対話」

その「第四の書神との対話」という書がある。第一の書は「天界の異象^{ビジョン}」という、天のビジョン。それから第二は「霊界物語」、第三は「瞑想録」となつていまして、この第四の書は「神との対話」というタイトルで始まつている。

その「第一章 神の現臨」という——神の臨在の啓示、神さまが現実に働いていらつしやるといふ——タイトルのもとに書かれていて、その「第一節 霊眼」開かれるとき、^{みたま}聖霊である神をみる」は聖霊によつて^{あい}相対する弟子とキリストとの問答という形をとっている。

《弟子——ああ、生命の泉であられます主よ、あなたを敬う者たちから、なにゆえお隠れになりますか。なにゆえに、あなたを仰ぎ見る者たちの目を飲ばせ給いませんか。

主——一、わが真実の子よ、真の幸福は視覚に頼るのではなく、霊の目を通して生まれ、胸に頼るのである。パレスチナでは、何千人もの人々がわたしをみたが、そのすべてが真の幸福を得たわけではない。滅ぶべき目がみるものは滅ぶべきもののみである。肉の目は不滅の神と霊的存在とをみるできないからである。例えば、あなた自身、自分の霊をみることができないのに、どうしてその造り手をみることができよう。だが、霊の目が開かれるときに、あなたは確かに聖霊である神をみることができる。そして、あなたが今わたしをみているのも、肉の目によつてではなく、霊の目によつてみているのである。

ニコデモとのお話で、「霊の眼が開かれなければ神の国に入れない。神の国を受けとることができない。霊から生まれなければ」と仰つていますね。

パレスチナで何千人という人々がわたしをみたときに、彼ら全員の霊眼が開かれた



しをみることができないというだけの信仰者も多い。それは目は多くのものをみることができても、目に入った目薬まではみえないのと同じである。だが、薬が眼球を洗い視力を強めるのは感じとることができるとは異なるのだ。

四、真の平和は、真の信者の胸の中にわたしが望むことから生まれる。彼らはそれを見ることができなくとも、その力は感じとりそこに幸せを感じる。そのような心の幸せをみることができなくとも、それを通してわが存在の平和を歎ぐことができる。それは、舌と砂糖の関係にも似ている。舌にある味覚とそれが感じとる甘さは、いずれもみることができない。そのように、わたしはまた「隠されたマナ」によって、子供たちに生命と喜びを与えるが、世はどのような知恵をもってしても、それを知ることができないのである。

五、ときとして、人は病にかかり、舌の味覚が損なわれることがある。そのようなときには、いかに美味しい食物を病人に与えようとも、彼にとっては苦い味でしかない。同じように、罪が霊的な事柄を味わう力を損なう場合がある。このような場合、わたしの言葉も奉仕も存在も、罪人を魅了するものとはならず、そこから益するよりもむしろそれについて議論し批判するようになる。

六、多くの信者はまた、イエスを預言者、人の子とみることはできても、神の子キリストとみることができずにいる。わたしが力をもってふたたび彼らに啓示されるときに、初めてそれがわかるのである。

七、あるとき、一人の母親が庭園の深いヤブの中に隠れていると、彼女の幼な児が行く先々で泣きながら、母を捜し歩いた。庭園をすべて回っても母をみつけることができなかった。そこへ、召使いがきていった。『坊ちゃん、泣くことはありません。木になったマンゴーの実をみてごらんさい。また、お庭にある沢山の可愛らしい花を。おいでなさい。少し採ってさしあげましょう。』だが、子供は泣いていった。『やだ、やだ。お母さんでなければ。お母さんのくれる食物は、どんなマンゴーの実なんかより美味しいんだ。お母さんはどんな花よりも素敵なんだ。それに、この庭にあるものが皆ほくのものだっていうことは、わかっているだろう。お母さんのものは皆ほくものだから。お母さんでなきゃ、いやだ。』ヤブに隠れていた母は、これをきくと駆け寄ってきて子供を抱き締め、何度も接吻をした。

こうして、庭園は子供にとって楽園となった。そのように、魅惑的で美しいものに満ちたこの世界という大きな庭園の中にいるわたしの子供たちもまた、わたしをみつけるまでは真の飲みを知ることはない。わたしは彼らといつまでも共にいるインマニエルである。わたしは、わたし自身を彼らに知らしめる。

八、海綿を水に沈めると、海綿は水を吸収するが、水は海綿ではなく海綿も水ではなく、両者が別々のものであり続けるのと同じように、わたしの子らはわが内に在り、



わたしも彼らの内に在る。これは汎神論ではなく、この世に在る者たちの心の中に築かれる神の王国である。そして、海綿が吸収した水と同じくわたしはすべての場所、すべてのものの中に在りながら、それらのものとは別である。

九、木炭の一片をとってみよ。あなたがそれをどれほど洗おうと、黒さは決して消えないが、一度火に通せば黒い色は消え失せる。それと同様、罪人が火の洗礼すなわち聖霊——それは父とわたしからくる。父とわたしとは一つであるから——を受けるとき、罪の汚れはことごとく洗い流されて、彼は世の光となる。

「火の洗礼すなわち聖霊」という。ヨハネ伝1章の後半部にいきますと、

「見よ、これぞ世の罪を除く神の羔羊」

という。それと

「火と聖霊でバプテスマされる方」

と。これはルカ伝でも言われている。火と聖霊、これは焼き尽くす。変なものを焼き尽くして、全く潔め尽くしてくれる。我々は十字架で潔められる。サンダー・シングは、聖霊が、聖霊の火が我らを完全に清めてしまうんだというふうに言う。ちょうど、炭が火で真っ赤に焼けますと、もう黒さがなくなるように、

それと同様、罪人が火の洗礼すなわち聖霊——それは父とわたしからくる。父とわたしとは一つであるから——を受けるとき、罪の汚れはことごとく洗い流されて、彼は世の光となる。炭の中の火と同じく、わたしは子らの中におり、彼らもわたしの中にいる。そして、わたしは彼らを通して自らを世に現す。》

突然何か降って湧いたように、「我はこれなり」と現れてくる。信者の心の中に宿って、その信者をとおしてご自身を現すんだと、言っている。

●「第二節信じる者たちにわたしは永遠の生命を与えん」

それから「第二節 信じる者たちにわたしは永遠の生命を与える」。これはヨハネ伝でいいますと、1章11節の、

「11言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。12しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。13この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである。」（ヨハネ1・11～13）

文語訳でいいますと、

「9 もろもろの人をてらす真の光ありて、世にきたれり。10 彼は世にあり、世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。11 かれは己の国にきたりしに、己の民は之を受けざりき。12 されど之を受けし者、即ちその名を信ぜし者には、神の子となる権をあたえ給えり。13 かかる人は血脈によらず、肉の欲によらず、



人の欲によらず、ただ、神によりて生れしなり。」(ヨハネ1・11～13)
これがサンダー・シングの本の第二節で、

《弟子——主よ、あなたが世界に特別に御出現くださったれば、神とあなた様の神性を疑う者はいなくなり、すべての者が信じ、義の道に入ることでしょう。

何で現れてくださらないのですか。何で人間に鮮やかに現れてくださらないのですかと問う。

主——一、子よ、わたしは万民の心の状態をよく心得ているし、必要に応じて一人の胸に自らを知らしめている。人を義の道に引き入れるには、わたし自身を現す以上によい手段はない。わたしは、人のために人となった。彼らが神を知るようになるためである。恐ろしい異質な者としてではなく、愛に満ちた、人に似たものとして世に現れた。人は神に似て、神の姿に象られたからである。

これもヨハネ伝の言葉ですね、14節、

「14言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、実に父の独子の栄光にして、恩恵と真理とにて満てり。」

「14言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。

それは父の独り子としての栄光であつて、恵みと真理とに満ちていた。」

これがさきほどのサンダー・シングの、

「どうして、現れてくださらないのですか?」

「いや、私は万人の必要にに応じて、一人一人に胸の中に私を知らしめている。私は人のために人となった。彼らが神を知るようになるためである。恐ろしい異質なものとしてではなく、あつと驚くような人を怖がらせるようなものではなく、人間の姿をとった。人間だったら親しみを感じるではないか。人間だったらお互いに理解しうるではないか」

と、そういうお気持ちですね。

愛に満ちた、人に似たものとして世に現れた。人は神に似て、神の姿に象られたからである。

人はまた、自分の信じている神、自分を愛してくださっている神に会いたいという、自然な願いをもっている。だが、父を見ることはできない。父のご性質は人の理解を超えているからであり、父を理解するには父と同じ性質をもたねばならないからである。

「幸いなるかな、心の清き者、その人は神を見ん」とキリストは言われました。だから、神さまと同じ心の姿になったら、神さまが映ってくる。ところが、悲しいかな、人間はそうなりませんから、見る事ができない。

父のご性質は人の理解を超えているからであり、父を理解するには父と同じ性質をも



たねばならないからである。一方、人は理解できる被造物であり、それがため神をみることはできない。だが、神は愛であり、その同じ愛の力を人にお与えになっているため、愛の満きを満たすために、神は人に理解できる存在の形をとられたのである。こうして神は人となった。それは子供たちがあらゆる聖なる御使いとともに彼を見、飲むためである。わたしをみた者は父をみたのである、とわたしが言ったのはそのためである。わたしは人の形をとっている間は、子と呼ばれるが、永遠の父である。だから実は、私は永遠の父なんだと。父と私は一つで、ただ「子」という姿をとって「父よ」と呼んでいるけれども、本質は一緒なんだ。父の分身とっていい。そういう関係だということですよ。

二、わたしと父とは一つである。太陽には光と熱があるが、光は熱ではなく、熱は光ではなく、別々の形をとって現れている。それでもこの二つが一つであるように、父からくるわたしも聖霊も、世に光と熱を与えている。洗礼の火である聖霊は、信じる者の胸の中であらゆる罪と汚れを焼き尽くして灰とし、彼らを清く聖なる者に変える。真の光であるわたしは、あらゆる闇と邪悪なる思いをかき消し、人々を義の道に引き入れ、ついには永遠の家に招き入れる。だが、太陽がただ一つであるように、われわれもまた三人ではなく一つである。》

私はかねがね、聖霊という方はキリストの分身だと言っていた。小池先生も同じことを言っておられる。

「聖霊というのはキリストの分身だ、キリストの分身、一つなんだ」

と、そう仰っている。キリスト・イエスは神の分身、だから神さまと一つなんだ。一つのものが別の形をとって現れているだけである。

「父と私は一つである」

ということ、そのように

「私は父そのものである」

と、そこまで言われているのでビックリした。「父・御子・聖霊は三位一体」といわれるのは、そういう角度からみると、なるほどなということですよ。

天の次元、霊の次元は、我々の三次元ではとても理解できない。これだけははつきりしておきましょう。一次元は線でしょ、二次元は平面でしょ、三次元は立体なんでしょうかね。四次元になると、それを超えたもの。聖書は絶対次元、超次元です。絶対次元の事柄を我々がこの三次元の頭脳でいくら探求研究しようとしても、それは無理です。天のことは天のことで、天の霊に属する事柄は霊によって導かれると、それはストーンと腑に落ちる。だから、「言葉で書こうとしたら、とても人間の言葉では書けない」とサンダー・シングは言っています。

ですから、皆さん、無理に聖書を分析したり研究したりして、解ろうと思うのは止めましょ



う。何か訴えてくるものをキャッチしたらいいんです。へたくそでも何でもいい。キャッチしたらいい。学者は厳密性を重んじ、絶えず新しいものを研究している。我々は子供ですから「キャッチ！」と言つて受けとる。それでいいんですよ。神さまは学者どもを必要としておられません。生命は、偉い人であろうと、そうでない人であろうと、学識があるうとなかろうと、そんなことは関係ない。

人間に共通なものは、いったいすべての人に共通なものは何でしょうか。それを聖書は与えているんですよ。ハートです、生命です。質は愛です。人のために一生懸命尽くしている。それが天においては尊ばれる。「私は偉い」なんて思っているのは全然だめ。それは地の次元では偉いかもしれない。でも、それは地の次元でお終いなんです。ここでお終いなので、一生懸命にやっつけていても空しいんです。

いや、私も地の人でありますから、やはりこの世でのいろんな仕事に気がなるんですよ。次から次に依頼がくる。何月何日にどこで何を発表しなければならぬとか——まあここも一つの発表ですけども——次から次にくる。そうするとやつぱり、心おたやかでない。そのときにサンダー・シングを読むと、そうなんですよ、しよせん地のことだと。地のことをやりながら、天の角度から、神さまが歡ぶようなことを、キリストが光を下さる。葡萄酒がなくなったら、水を葡萄酒に変えてくださる。その神さまの力、キリストの御力、奇蹟の御力によつて私はこの地を歩いていく。こう思えば、気が楽です。そう思わないと、とてもこの世の計算では、私は破産しますよ、多重債務者です。本当なんです。

ですから、皆さん、いろんなことで、この世のことをいろいろ考えていましたら、いくらかスケジュールをたててもおさまらないことがあるでしょ。そんなときにやつぱり、そこからちよつと離れて、天の次元に魂を入れる。それには、天の次元から語りかけてくれるサンダー・シングの本とか、ヨハネ伝とか、ヒルティとか、そういうところにスツと逃げ込んで、そこでしばらくいることです。この世のことは相対的なんです、絶対的なものではない。なくてならないものではない。

サンダー・シングが言っている。この世ではいろんな苦勞がある。いろんな苦勞、艱難辛苦、それを通して魂がみがかれていくという。みがかれなさいといけない。そのために我々にこの尊い人生を与えてくださった。ヒルティと同じことを言っている。いろんな艱難辛苦が臨んできたときに、それをヤコブ書は「歡びとせよ」と言っていました、

「ひたすら歡びとせよ」

と。同じような角度のことをサンダー・シングは言う。そう思うと、我々人間にどつばななんてないんです。行き詰まりはない。水が葡萄酒に変ってくれるんですよ。

あの預言者エリヤは、イゼベルという女王から命を狙われて、逃げ回つて、とうとう川岸に行つて、そこでシヨボンとしていた。そしたら、カラスが飛んできて、食べ物運んでくれたという(列王記上17・6)。そして、



「か細い声を聞いた」

ということが列王記(上19・12)に出てきます。そのように、我々は行き詰まったときに、人間の力でもうだめだというときに、フツと天界が開けて天使たちが現れてくれる。旧約聖書でもしばしばそれが出てます。ハガルが主人のサライにいじめられて出て行った時に荒野で天使が現れる(創世記21・17)。そういうお話というは決して昔のことではない。今だってそうなんです。だから、天の次元は、二千年前であろうと、今であろうと、変わらない。現在なんです。常に現在の話なんです。アブラハムにせよ、何にせよ。現在のものとして受けとらないといけない。それもサンダー・シングが言ってくれている。

≡三、神が人にお与えになったどのような尊さも、力も、気高い能力も、実際に活動させなければならぬ。でなければ、次第に衰え、ついには滅びてしまうであろう。そのように、信仰もまた、生きた神に真実つながれていなければ、罪の力によって崩され疑いになってしまう。『これこれの疑いが除かれれば、信じる用意がある』という言葉がよくかれる。

ヒルティにも出てきましたね、「これこれの問いに答えてくれたら、納得したら信じます」という。それをサンダー・シングは言うんです。

それは、脚を骨折していながら、骨接ぎをする前に痛みをとってくれと、医者に願っているようなものである。痛みが骨折からきているのであれば、これほど馬鹿げたこととはない。骨接ぎをすれば必ずと痛みは消えるのだ。そのように、罪の行為によって人は神との絆を断ち切り、霊的苦痛である「疑い」が湧き起こってくる。そこに必要なのは、神とのつながりを一新することである。そうすれば、わが神性と神の存在に關して湧き起こってきた疑いの念は自然と消え去るであろう。そして、痛みに代わって世が決して取り去ることのできないあの驚くべき平和が生まれよう。わたしが肉となつたのは、まさにこのためである。神と打ち砕かれた哀れな人間との間に和解が起こり、人々が天においていつまでも、神と共に幸せを楽しむためである。

四、神は愛であり、あらゆる被造物の中に、とりわけ人間の中にこの愛の力をおき給うた。であれば、われわれに生命と理性と愛そのものを与えてくださった愛なる神が、愛の捧げ物を受けとるのは当然のことである。自らのお造りになったすべてのものを愛することが神の願いである。そして、この愛が正しく使われないなら、われわれが心を尽くし魂を尽くし、思いと力の限りを尽くして、愛の与え主である神を愛さないならば、愛は気高い場所から転落し、利己主義と化す。こうして、自分自身にも他の被造物にも災いをもたらすことになる。利己的な人間はみな、はからずも自らを滅ぼす者となるのだ。

わたしは、こうもいった。『自分を愛すると同じように隣人を愛せ』と。ある意味では、すべての人が互いの隣人ではあるが、あの言葉は、あなた方の近くに生きている人々



を特に指した言葉である。仲の悪い隣人であっても、二三日ぐらいいの間なら平和にや
ってゆくことは容易である。だが、近くに住んでいて毎日のように厄介の種を作る者
を堪え忍び、

何か、定年で退職したご主人のことを言っているようにも聞こえる（笑）。サンダー・シン
グはそんなことを面白く表現している。

自分のように愛することは至難の業である。だが、あなたがこのような大きなもめ事
を克服するならば、誰をも自分のように愛することは、もっと容易になる。

人が思いを尽くし、心を尽くし、魂を尽くして神を愛し、自分のように隣人を愛す
るときに、疑いの入る余地はなくなり、終わりのない神の王国が彼の内に築かれる。
そして、人は愛の炎の中で溶かされ鑄られ、その初め、人を自らの姿に似せてお造り
になった天の父の似姿に象^{かたど}られるのである。

愛がその人を完^まった姿に変えていくという。

五、また、わたしは真摯^{しんし}な心でわたしを探し求める者たちに、わが言葉（聖書）をも
って自らを現しめている。わたしが人を救うために人の姿をとったように、霊であり
命であるわが言葉もまた、人の言葉で書かれている。つまり、霊感的要素と人間の要
素がそこで一つにされている。》

私は思うんですよ、この聖書というのは本当に矛盾だらけであつたり、食い違いがあつ
たり、間違いだらけなんです。人間が書いているんだから。それでいながら、その破れに
満ちた聖書の奥から光っているものがある。だから、まさに「霊感的要素と人間的要素」
が混在している。私たちはこの聖書の奥から語りかけてくる、この霊の語りかけ、神の霊
の語りかけ、キリストの語りかけ、それをハートでキャッチする。これが大事だといふこ
とが本当にわかりますね。

だから、さつきから申しますように、あまり研究だとか、学者の言うことなんかに重き
を置かれないで、むしろ、ダイレクトに自ら聖書の中に入って行って祈り心で、

「主よ、どうぞ、私の霊の眼を開いてください。今、鈍っていますので、開いてく
ださい」

と。サンダー・シングは、「言葉で祈っていない」という。心の中で思いを深くして祈って
いる。それから、「雑音はやはり嫌だ」と言っています。静かな所で祈る。今はテレビや何か
の音が満ちているでしょ。だから、それを消して静かな所で祈る。そういうことを言っ
ています。

《だが、人はわたしを理解しないのと同じく、わたしの言葉を理解していない。ヘブ
ライ語とギリシア語の知識でそれを理解することが必要なのではない。必要なのは、
預言者と使徒たちにそれを書かした聖霊との交わりである。聖書の言葉は、疑いも
なく霊的であり、世の批判に通じている者であれただの子供であれ、聖霊によって生



まれた者のみが、よくそれを感得しうるのである。靈的言語は人の母国語でもあるため容易に理解できるはずなのだ。

我々の生まれる前からそういう言葉を知っていたはずだと言わなければなりませんね。

だが、この世の知恵しかもたないものは、聖霊を受けていないため、それを理解することはできない。

だから、いかにサンダー・シングが聖霊というものを尊んでいるかということがわかりやすいですね。それから、今この世の中が矛盾だらけで、「こんなものを神さまが造ったと言えるのか」と文句を言う人がたくさんいる。しかし、それは浅薄だ。まだ完成していない。彫刻でも建築でも、途中の段階で言うのではなくて、完成されたものを見てから文句を言いなさいと。神さまはまだ創造の途中であるということも言っている。

……神は一日にしてこの世界を今の形にしたのでもなく、一日にしてそれを完成させることもなさらないのである。全被造物は完成へ向かって動く。そして、この世の人間が神の目によって、欠けるところ一つなき完全な世界をみる事ができれば、彼もまた神の御前にへりくだり、『すべては大変よい』と告白することであろう。

それから、こんな譬え話も言っている。ちょうど、卵の中に雛の命が宿っている。卵の中でだんだん雛が育ってくる。その雛に向かって母鳥が、「お前はもうじぎ生まれてくるんだよ。この世界はこんなに素晴らしい。お前は羽が生えたら飛んでいくことができる」と、いくらいろんなことを話して聞かせても、殻の中にとじこもっている間は何もわからない。信じられない。「この目で見ないと、確かめないと信じない」と言っている。人間はちょうどそのようなものではないかということも言う。

七、人の霊が体内に留まっているのは、卵の殻の中にいる雛に似ている。あらゆる種類の実と花、川や山々のある広大な世界が外にあり、母鳥もそこにいて、殻から抜け出せばそれがすべてみえるのだと、中にいる雛に教えることができたとしても、雛はそれを理解もしないし信じることもできないであろう。今や使つばかりになつている翼と目でもってその世界をみ、飛ぶことができるのだと教えてやっても、雛が実際に殻から出てくるまでは、それを信じることも証拠立てることもできない。

それと同じように、この殻のような肉体を超えてみる事ができず、弱々しい翼のような彼らの思いも、頭脳という狭い限界を超えることができないために、来世についても、神の存在についても確信できずにいる者が多い。彼らの弱い目は、神を愛する者のために神がお備えくださった永遠の、消えることなき宝を発見することができない。この永遠の生命を得るのに必要なことは、この体に留まっているうちに、雛が母鳥から受けとるあの生命を与えてくれる熱を、信仰によって聖霊から受けとることである。さもなければ、死と永遠の損失をみる危険がある。

親鳥が卵を抱いて温めている。卵の中の雛がその熱を受けとることによって生まれてくる



ことができる。そのように、この体の中に我々の生命が隠されている。ところが、そのさまざまからくる熱を、信仰というものによって聖霊から受けとることが必要である。これが永遠の生命を得るのに必要なことだと。

八、始まりあるところ、生命には必ずや終わりもあるに違いないという人々も多いが、これは本当ではない。その聖旨みむねによって無から有を創造された全能者はまた、その力ある聖言によって、造られたものに不滅性をお与えになることもできるのである。でなくば、神は全能とはいわれえぬであろう。この世の生命が崩れやすくみえるのは、それが変わりやすく崩れやすい事柄に従っているからである。だが、この生命がこのような移ろいやすい力から解かれ、永遠の生命の源泉たる永遠不滅の神の保護の下におかれるならば、それは死の淵より免れ永遠性を得る。

信じる者たちに、わたしは永遠の生命を与える。彼らは決して滅びることなく、わたしの手から彼らを奪える者は誰一人いない。わたしは神である主、常にいます、昔います、後にくる万物の支配者である。》

●第二章 罪と救い

それから更に、「罪」ということについて面白いことを言ってますので、このこともご紹介しておきましょう。「第二章 罪と救い」。「第一節 罪あるいは悪は独自に存在するものではない」ということを言う。では、罪とは何ですかと。

《キリスト——一、罪とは聖旨を退けて自分自身の意志に従って生きること、自分の欲求を満たすために真なるものを捨て去り、そのようにして幸せを得ようと考えることである。》

これが罪だという。キリストは、「御意を行うことが私の食物だ、私の生命だ」と言われました。それに対して、

罪とは聖旨を退けて自分自身の意志に従って生きること、自分自身の欲求を満たすために真なるものを捨て去り、そのようにして幸せを得ようと考えることである。

「自分自身を大事にしなさい。あなたは何よりも尊いんですよ。決して自分を捨てはだめですよ」

と。まあ捨ててはだめですけどね。何か利己主義を育てているように思えますね、自己完成とか何とか言っています。そうじゃなくて、本もののゆえに己を空しくしていけば、本ものがあなたを完まっとうう本ものに仕立て上げるという、その角度が完全になくなっているんですね、今の教育は。

だが、そうすることによって、人は真の幸福を得ることも、真の歓喜を楽しむこともできない。罪は個人性をもたないので、誰かそれを創造したという言い方はできない。



それは、ただ単に、ある状態の名称にすぎない。ただ一人の創造者が在り、そのお方は善である。》

光がない状態が「闇」だという。闇というものが独自に存在するのではない。光がない状態が闇なんです。光は確かに太陽から来てます。光がくると闇は消えてしまう。光がなくなると闇になる。ですから、闇というものが積極的に存在するわけではない。光の欠乏状態が闇なんです。そうすると、「死」とは何かというと、生命がない状態が死なのかもしれません。生命が失せている状態が死という状態なのかもしれませんね、霊的には。

ですから、我々がキリストをいただいて、キリストという永遠の生命のご本尊とたえず一つであらせていただくならば、その方は私たちを抱いてくださっている、私たちの中に入ってくださいるんです。そうすると、そこにはもう暗きもの、死はないんですね。永遠の生命なんです。それを我々は大膽に信じましょうよ。死というものは、霊的な意味では、生命がない姿です。この肉体では、死というものは確かに、心臓が止まって土に還っていく、これが死ですけども、これは一時的な姿です。我々の本質は肉体ではない。肉体の中にある霊、これが本当のものをいただいて、永遠に神さまの世界で生き続ける。そのための修行の場としてこの地上というものが与えられている。地上で我々が元気で真の生き方をするように、神であるキリストが人の姿をとって、

「人はこういうふうに生きるんだよ」

ということ、地の次元においてきて、いろいろと語ってくださいたんですね。

「でも、地の次元だけで生きて行き詰まってしまうよ。だから、絶えず天の次元とつながるようにしなさい」

と、そういうことをキリストは教えてくださったんだということですよ。

●洗礼者ヨハネの証し

ヨハネの福音書に戻ります。1章14節、

「14言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。

それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。15ヨハネは、この方について証しをし、声を張り上げて言った。『わたしの後から来られる方は、わたしより優れている。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。」16わたしたちは皆、こ

の方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた。17律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。18いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。』（ヨハネ1・14～18）

これが序曲です。全体のいわばプロローグと申しますか、予告編になる。そして、19節



からは現実的な場面に戻ります。天の次元はこれで一応終わります。これから地の次元が始まっていきます。

この「バプテスマのヨハネ」の描き方も、さっきの共観福音書と共通な面と、違っている面があります。マルコの福音書は、ヨハネから始まっている。

「神の子イエス・キリストの福音の初め。……³荒れ野で叫ぶ者の声とする。

主の道を整え……」

という、ヨハネのことから始まっています。ルカの福音書はもつと先から始まっている。マタイも系図があつて、イエスがお生まれになったことがあつて、それから洗礼のヨハネのことが出てくる。みなそれぞれ違っているけれども、共通しているのはイザヤの預言の、

「呼びかける声がある。主のために荒れ野に道を備え、私たちの神のために荒れ地に広い道を通せ」

というイザヤの預言を引用していることと、それから、ヨハネの行動、生活について、

「ラクダの毛衣を着、腰に皮の帯をしめ、^{いなせ}蝗と野蜜を食物としていた」

ということが描かれています。共通の福音書では、イエスがヨハネの所にやって来られる。ヨハネが洗礼を施していた。これは悔い改めのバプテスマです。烈しいことを言っています。

「あとからおいでになる方は火と聖霊でもってバプテスマを授ける。お前さん

たちは生活を悔い改めなければ、酷い目にあうぞ。こわいぞ、この方は」

と、脅かしている。「はあ、かしこまりました。私はどうしたらいいですか」と、兵隊さんが訊くと、

「お前さんはみんなからむしり取り過ぎたから返してやれ」

とか、取税人に対して、

「お前は取りすぎだから返してやれ」

とか、いろいろ強いことを言っています。要するに、現実生活における悔い改めを盛んに迫っている。

「火と聖霊によってバプテスマされる審判の主である」

ということを言っている。それが共通している。

それからもう一つ共通しているのは、そのヨハネの所にイエスがヒヨコ、ヒヨコ、やって来られる。「ヒヨコ、ヒヨコ」と、私のイメージでは、「ヒヨコ、ヒヨコ」とイエスはやって来られる。そして、

「私も洗礼を受けさせてほしい」

と言う。ヨハネは、

「とんでもありません。私はあなたさまから、それこそ霊の洗礼、バプテスマをいただかなければいけませんのに、私ごとき者が水の洗礼なんてとんでもないことです」



「いやいや、今は受けさせてほしい」

と言つて、イエスはヨハネから洗礼を受けられる。水の中から上がつて祈つておられると、天界が開けて、聖霊が鳩のごとく降^{くだ}つてきた。そして、天から声がした。

「これは私の愛する子、私の心になかう者である」

と。これはこの三つの福音書、共観福音書に共通している。それから荒野に追いやられて、試みに遭われる。

ところが、ヨハネをみますと、「荒野に呼ばれる声」という姿は出ているんですけども、ヒヨコヒヨコと、イエスがやつて来て、ヨハネからイエスが洗礼を受けられるというのはどこにも出てこない。むしろ、その点でもだいぶ変つていきます。ちよつと見てみましょう。ヨハネ福音書の1章19節、

「19さて、ヨハネの証しはこうである。

「証し、証し」言ってますね。さっきのプロローグの所でも6節に、

「6神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである。7彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである。8彼は光ではなく、光について証しをするために来た。」(ヨハネ1：6～8)

と、そういうことを言ってます。それから、15節へいきますと、

「15ヨハネは、この方について証しをし、声を張り上げて言った。『わたしの後から来られる方は、わたしより優れている。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。」

ということが出てきました。そして19節から、

「19さて、ヨハネの証しはこうである。エルサレムのユダヤ人たちが、祭司やレビ人たちがヨハネのもとへ遣わして、「あなたは、どなたですか」と質問させたとき、²⁰彼は公言して隠さず、「わたしはメシアではない」と言い表した。²¹彼らがまた、「では何ですか。あなたはエリヤですか」と尋ねると、ヨハネは、「違う」と言った。更に、「あなたは、あの預言者なのですか」と尋ねると、「そうではない」と答えた。²²そこで、彼らは言った。「それではない、だれなのですか。わたしを遣わした人々に返事をしなければなりません。あなたは自分を何だと言うのですか。」²³ヨハネは、預言者イザヤの言葉を用いて言った。「わたしは荒野で叫ぶ声である。『主の道をまっすぐにせよ』と。」

²⁴遣わされた人たちはファリサイ派に属していた。²⁵彼らがヨハネに尋ねて、「あなたはメシアでも、エリヤでも、またあの預言者でもないのに、なぜ、洗礼を授けるのですか」と言う、²⁶ヨハネは答えた。「わたしは水で洗礼を授けるが、あなたがたの中には、あなたがたの知らない方がおられる。²⁷その



人はわたしの後から来られる方で、わたしはその履物のひもを解く資格もない。」(ヨハネ1・19～27)

これは他の福音書でもみな言っているんです、「私は靴のひもを解く値打ちもない」と。ところがここでは、「あなたがたの中には、あなたがたの知らない方がおられる」と、こんなことは他の福音書には出てきません。「では、どこにいらつしやるの?」というわけですね。そして次に、

「²⁹その翌日、

とある。ヨハネ伝の書き方はおもしろい。「三日目に」とか、いつから計算して三日目かわからない。「その翌日」とか、そんなふうな話の進め方なんです。

ついでに申しますと、他の福音書で「そのころ」とか、「そのとき」とか出てくるのは、特定の時ではなくて漠然と言っているのだということが註解書にあがっていました。「『その頃』というの時は時を示すものではなく、単に推移を表わすときに著者がよく用いる決まり文句である」と。ルカ伝でははっきりと時を表わしている。ヨハネが現れたのは「皇帝テベリウスの治世の第15年」とはつきりと時を示しているけれども、それ以外の福音書では「その頃」とかという茫漠たる言い方をしているということが註解書にありました。

²⁹その翌日、ヨハネは、自分の方へイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。」

これもヨハネの福音書だけです。

³⁰『わたしの後から一人の人が来られる。その方はわたしにまさる。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。
³¹わたしはこの方を知らなかった。しかし、この方がイスラエルに現れるために、わたしは、水で洗礼を授けに来た。³²そしてヨハネは証した。「わたしは、³³霊が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを見た。³³わたしはこの方を知らなかった。しかし、水で洗礼を授けるためにわたしをお遣わしになった方が、『³⁴霊が降って、ある人にとどまるのを見たら、その人が、聖霊によって洗礼を授ける人である』とわたしに言われた。³⁴わたしはそれを見た。だから、この方こそ神の子であると証したのである。」(ヨハネ1・29～34)

他の福音書では、ヒヨコヒヨコと、イエスがヨハネの所へ来て「洗礼を授けてちょうだいね」と言っ、そして洗礼を受けて水から上がられたら、天が開けて聖霊が鳩のごとく見える形で降ってきた。そして、「これは私の愛する子、わが心にかなう者だ」という御声が聞こえてきたと、三つの福音書が共通して言っている。そのことはここには出てこない。むしろ、ヨハネは

「既にどこかで、そのお方の上に聖霊が降るのを私は見た。それを見たならば、そ



の方こそ——お前を遣わす、お前を先駆者として遣わし、その方が来られることを、その方のことを証言せよ——そのお方がその者だということを、私をお遣わしになつた神さまが私に示しておられる。私ははつきりそれを見た。だから、私は証言する」

と、そういう言い方をしていますから、全然他の福音書とは違うでしょ。要するに、福音書を書いたヨハネが、洗礼のヨハネをこんなふうに表示しているのは、それを通して、本当にこのイエスというお方が——自分(洗礼のヨハネ)は道を備える、悔い改めの道備えをする。そのあとに——ご本尊がやつて来られる。その方は何かというところ——私(洗礼のヨハネ)は水の悔い改めの洗礼をするが——その方は聖霊と火でバプテスマをする。本当の救いへと入れる。本当の救いへ入れるためには、十字架があります。

「世の罪を取り除く神の小羊」

という、これがヨハネだけに出てくる。

「小羊」というのは、すぎこし過越の祭り、出エジプト記の中に出てきます。一歳のおす牡の小羊を、傷もしみもない小羊を、殺してその血を家の入口の鴨居と柱に塗る。その夜、エジプトは神さまに打たれる。そして、パロの子供をはじめ、エジプトの長男は全部死ぬ。ところが、鴨居に血が塗つてある所だけは災いが過ぎ越していくという。そこから「過越の祭り」というのが始まった。しかも、その時に「じよしやうさい除酵祭」の種入れぬパンを食べることが言われる。イースト菌を入れない。「パン種」というのは悪い意味によく使われる。

「パリサイとサドカイのパン種に気をつけなさい」

とキリストが言われた。それは不純なるもの、肉なるよろしくないもの。それに対して、「種入れぬパン」というのは、純粋な、純なるもの、味も何もないけれども、純なるものである。真水みたいなものです。

「それを一週間続けて食べる」

ということが言われる。その「過越の祭り」と「除酵祭」の二つが一緒になる。それから、イエスが十字架にかかれる前、弟子たちと一緒に食事をされますね。その時、ルカ伝をみると、

「私はこの過越祭の日にあなた方と最後の晩餐をすることを望みに望んでいた」

と言われた。そして、食事の時にパンを裂いて与えて、

「これは私の体である。葡萄酒は私の血である」

と言つて配られた。だから、キリストは自分自身が過越の小羊で、あの鴨居に血が塗られ、その血は災いを避けてくれた。そういう「小羊」。口語訳は「小さな羊」となっていますけれども、昔は「こひつじ羔」という字を書いて、羊が火で焼かれている姿、犠牲の羊を表わしている。キリストは自分が屠ほぶられる羔として自覚しておられる。そのことを伝えるためにヨハネは



わざわい、

「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」

ということをごく言っている。そういうことを思います。

●最初の弟子たち

それから次へいきます。また、

「³⁵その翌日、

と。今度は、最初の弟子たちが現れるところです。他の福音書では、ペテロが網を繕っていたら、イエスが通りかかって、

「お前は弟子になりなさい」

と言ったら、

「はいっ」

とすぐ従ったとかいうことが書かれています。あれもそんな、仕事をしている人間に「弟子になれ」と言つて、「はい」と答えて連れて行ったなんて、そんなバカなことはない。あれは極端な表現だというふうに学者は説明しています。多分そうでしょう。でも、そういうふうな形で召しが表れる。マルコ伝でもマタイ伝でもそうです。ところが、ここは違うんですよ。ある意味では長閑^{のどか}で、楽しいですね。「最初の弟子たち」というところで、1章35節、

³⁵その翌日、また、ヨハネは二人の弟子と一緒にいた。³⁶そして、歩いておられるイエスを見つめて、「見よ、神の小羊だ」と言った。³⁷二人の弟子はそれを聞いて、イエスに従った。³⁸イエスは振り返り、彼らが従つて来るのを見て、「何を求めているのか」と言われた。彼らが、「ラビ——『先生』という意味——どこに泊まつておられるのですか」と言うと、³⁹イエスは、「来なさい。そうすれば分かる」と言われた。そこで、彼らは何も行つて、どこにイエスが泊まつておられるかを見た。そしてその日は、イエスのもとに泊まつた。午後四時ごろのことである。⁴⁰ヨハネの言葉を聞いて、イエスに従つた二人のうちの一人は、シモン・ペトロの兄弟アンデレであった。

ここで素性が出てくる。「ヨハネは二人の弟子と一緒にいた」という。洗礼のヨハネのお弟子さんだったということになっています。ペテロの兄弟アンデレは。他の福音書では「漁師であった」ということですけれども、ここではヨハネの自分の弟子になっている。「二人は、シモン・ペトロの兄弟アンデレであった」という。

⁴¹彼は、まず自分の兄弟シモンに会つて、「わたしたちはメシア——『油を注がれた者』——という意味——に出会つた」と言った。⁴²そして、シモンをイエスのところに連れて行つた。イエスは彼を見つめて、「あなたはヨハネの子シ



モンであるが、ケファ——『岩』という意味——と呼ぶことにする」と言われた。（ヨハネ1：35～42）

この場面はおもしろいですね。洗礼のヨハネの弟子のアンデレが——お父さんはヨハネと称うと別の福音書に出ている——洗礼のヨハネに付いて行ったら、向こうからイエスが来られた。そしたら、ヨハネが「見よ、神の小羊」と言う。弟子はびっくりして、「へえ、神の小羊？」といつて思わずついて行くわけですね。そうすると、イエスは振り返って、「何を求めているの？ 何か用かね」という感じでしょうね。

「どこへ、お泊まりなんですか？ ついて行きたいんですけども」と言つて、ついて行つた。そして一緒に泊まった。カトリック系の註解書を見ると、

「これは夕方になると安息日になって、もう歩いたらいかん。安息日だから、ひき返すわけにいかんから、そこに泊まったんだらう」

と書いてありました。そうかもしれない。私なんかはむしろ、ついつい惹かれていって、一緒に泊まらせてもらうという方が私には慕わしいんですけれども。思わず惹かれて行つたという。これが楽しいではありませんか。そうすると、そこでペテロをつかまえて、

「お前は岩だ」

と。これはマタイの福音書では終わりの方に出てくる。山上で変貌されて、その時に

「人々は私のことを誰と言っているか？」

「ある人は預言者だと言っています」

「お前はどうか？」

「あなたは神の子キリストです」

と。そうしたら、

「それを表したのは血肉ではなくて、父の霊である。お前は岩、ペテロ、その岩の上に教会を建てよう」

というお話が出ている。あれがカトリック教会でペテロを元祖とした根拠のようです。「岩の上に教会を建てる」と仰つた。「ペテロ、お前さんが第一号だ」というわけですよ。そういうふうなところで、「ペテロ」という名前が「岩」というのが出てくる。ヨハネ伝では一番トップに出てきている。その次がまた楽しい。

「⁴³その翌日、イエスは、ガリラヤへ行こうとしたときに、フィリポに出会つて、
「わたしに従いなさい」と言われた。⁴⁴フィリポは、アンデレとペトロの町、
ベトサイダの出身であった。⁴⁵フィリポはナタナエルに出会つて言つた。「わ
たしたちは、モーセが律法に記し、預言者たちも書いてある方に出会つた。
それはナザレの人で、ヨセフの子イエスだ。」⁴⁶するとナタナエルが、「ナザレ



から何か良いものが出るだろうか」と言ったので、フィリポは、「来て、見なさい」と言った。⁴⁷ イエスは、ナタナエルが御自分の方へ来るのを見て、彼のことをこう言われた。「見なさい。まことのイスラエル人だ。この人には偽りがない。」⁴⁸ ナタナエルが、「どうしてわたしを知っておられるのですか」と言うとき、イエスは答えて、「わたしは、あなたがフィリポから話しかけられる前に、いちじくの木の下の下にいるのを見た」と言われた。

透視ですよ。向こうが見えているわけです。

「お前さん、フィリポが声をかける前に無花果の木の下の下にいた。ちゃんと見たんだよ」

と。もうナタナエルは

「あなたは神の子です」

と。こういう正直者をキリストは好きなんです。くそみそに言っているかと思うと、もうびつくりして

「まいりました!」

と。サマリヤの女がそうでしょう。

「あなたは五人の夫がいたけれども、今は夫ではないね」

と言ったら、

「あなたは預言者だ!」

と。正直にそのまままぶちまけている、そういう魂をイエスはとても愛されています。そして本当のことを仰る。また、敏感にそれを感じて、

「ああ、あなたは神の子です!」

と。案外こういう素朴な人たちがイエスに非常に近いのではないのでしょうか。「ナザレから何の善き者が出ようか。この田舎から何が出るものかね」なんて言ったナタナエルが今度は、

「⁴⁹ ナタナエルは答えた。「ラビ、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です。」⁵⁰ イエスは答えて言われた。「いちじくの木の下の下にあなたがいるのを見たと言ったので、信じるのか。もつと偉大なことをあなたは見ることになる。」⁵¹ 更に言われた。「はつきり言うておく。天が開け、神の天使たちが人の子の上に昇り降りするのを、あなたがたは見るようになる。」

イエスは洗礼を受けられた時に、天が開けて聖霊が鳩のごとく降ってきた。今度はそれだけではない。

「これから絶えず天が開けて、天使たちが昇り降りする。そういう天の次元の事柄がこれから次々と展開するようになる。それをきつとあなたは見る事ができるよ」

と励まされた。そう受けとりたいですね。こういうお話をみていると、何か楽しくなりま



せんか？ 私も出会ってみたい、私もこんな人になりたい。イエスというお方に会いたい、会ってみたいと。心から願うならば、きつと会えるはずなんでしょうね。

●「第一の書 天界の異象 第八章 義者の行末」

それでした、サンダー・シングのことをちよつとご紹介します。「第一の書 天界の異象」の「第六章 義者の行末」というところに出てくる。

《ある義人の死。三十年の間、全身全霊をもって主に仕えてきた真のクリスチャンが、臨終の床に就いていたときのことを、ある天使が話してくれた。死ぬ二、三分前に、主は彼の霊眼を開き、体を離れ去る前に霊界を一瞥して周囲の人々にみたことを話せるようにしてくださいました。彼は、天が自分に向かってすでに開かれ、天使と聖徒の一同が彼を迎え入れるために進み出て、入口にはキリストが両手を大きく広げて待っていてくれるのを見た。この光景を目にしたとき、彼は付き添いの人々が驚くほどの歓喜の叫び声をあげた。

「おお、何という歓びであろう。わたしは主とお会いできることをずっと待ち続けていたのだ。みよ！ 愛に光り輝く主の御顔を。わたしを迎えにきてくれている天使の群れを。何と神々しい場所だろう。わたしは本当の故郷に向かって旅立つのだから、どうか悲しまず、喜んでおくれ」

ベッド脇にいた人たちの一人が、「意識が朦朧としていたようだ」と小声で話した。この言葉をきくと、彼はいった。

「違う。意識ははっきりしている。この素晴らしい光景がみえませんか。あなたの目から隠されているとは残念だ。お別れです。次の世でまた会いましょう」

こういうと、彼は両眼を閉じ、「主よ、わが魂を御手に委ねます」との言葉とともに永眠した。

魂が体を離れるや、天の御使いたちは彼を腕に抱きとめ、天に向かおうとしたが、このとき彼は二、三分待つてくれるようお願いした。自分の動かない体と肉親らを見て、彼は天の御使いたちにいった。

「体を離れたあとで、自分の体とあの人たちをみられるとは知りませんでした。わたしがこうして試しているように、あの人たちにもわたしをみせてあげたい。そうすれば、あの人たちはわたしが死んでいないと知り、今のよつに嘆き悲しむこともないでしょう」

それから、彼は自分の霊体をよく調べ、それが素晴らしく軽きめ細かなものであり、粗い肉体とは著しく異なることを知った。そこで、彼は冷たくなった自分の亡骸に泣きつき、接吻し続けている妻子たちの行為をやめさせようとした。自分の微細な霊の手を広げて、彼らに説明しながら、大きな愛をもって彼らを亡骸から遠ざけようとして試



み始めた。

だが、彼らは彼をみることもなく、声をきくこともなかった。子供たちを押し戻そうとしたとき、まるで自分の手が空気でできているかのように、子供たちの体をすり抜けたかにみえたが、子供たちはこれに気づかなかった。このとき、天使の一人がいった。

「きなさい。永遠の家に参りましょう。彼らの姿に悲しんではなりません。主ご自身とわたしたちもまた、彼らを慰めましょう。たった二、三日の別れです」

こうして、彼は天使たちに伴われて天へと旅立った。少し行ったところで別な天使の群れが大歓声とともに合流し、先に他界していた多くの友人、身内も会いにきた。これを見て、彼の歓びはいっそう高まった。

天界の門にきたとき、天使たちと聖徒たちは無言のまま脇に寄った。中へ入った彼は入口のところでキリストと出会い、即座にひれ伏したが、主は彼を抱き起こし、「よくやった。忠実な下僕だ。神の歓びに入るがよい」と祝福の声をかけられた。このときの歓びは言葉に表わせるものではない。涙が止めどなく彼の両頬を伝い落ちた。その涙を、主は大なる愛をもってぬぐい去り、「あの一瞬輝く住まいに連れていきなさい。初めからこの男のために用意されていたものだ」と天使に命じた。

彼は、主に背を向ければ失礼に当たると思い、なかなかその場を離れようとしなかったが、ようやく自分の住まいに目を向けたとき、どこをみても主のお姿を拜せることを知って驚いた。キリストはどこにでも存在し、天使と聖徒はどこでもそのお姿をみることができるのである。……

……次に、わたしはこの神の人が、割り当てられた住まいを遠く彼方から調べているのを見た。天では、すべてのものが霊的であり、霊眼は介在するものすべてを貫き、莫大な距離を見透かすことができるのである。

ずーっと向こうが見えてしまう。だから、ナタナエルが無花果の木の下におることをスーッと見えてしまうんですね、この霊の眼は。

天の無限空間全域に神の愛は表され、そのどこにおいても、あらゆる種類の神の被造物が終わりなき歓喜の中で神を讃え、感謝しているのを見ることが出来る。

……家の中に入ると、自分がキリストの面前にいるのを知って驚いた。彼は感極まって叫んだ。「主の元を去って命じられるままにここに来たのに、主はわたしと住むためにここにおられる」。家の中には想像しうる限りのものがあり、誰もがすすんで彼に仕えた。近くの家々には、彼と似た心の聖徒たちが幸せな交わりの中に住んでいた。このような天の家こそ、世の始まりから聖徒たちのために備えられてきた王国、ここではキリストに真に従った人々を待っている輝かしき未来なのである。》

ヨハネ伝14章のところに、



「汝らは心を騒がせるな、神を信じ、私を信じなさい。天には住まいがたくさんある。私が向こうへ行つて、用意ができたらまた帰ってくるから。場所を備えに行くから」

と仰つておられる。それがここでサンダー・シングが言われている。「天の住まい」を指しておられるのかななんて思います。それから、「天界の生活」のことが描かれている。

《偽善者は天界には住めない。そこでは、誰もが他人の生活をありのままみるからである。栄光のキリストから流れ出る「すべてを明らかにする光」によって、悪人たちは自責の念に駆られて逃げまどい、義人たちは天の光の御国にいる至福に与る。そこでは、彼らの善は誰の目にも明らかであり、絶えることなく増し続ける。彼らの生長を阻めるものは何一つなく、むしろ生長を助け支えるものばかりがある。義人の霊魂が到達した善徳の度は、全身から放たれる輝きによって知られるようになる。その人の性格も性質も、虹色に似たさまざまに輝く栄光によって自ずと明らかになる。天には嫉妬のごときものはない。誰もが他の霊的高揚と栄光をみて飲み、自分を追求するという動機をもたずに、常に他に仕えることを飲みとする。天の数知れぬ賜物と祝福は、万民が等しく使うためにある。利己主義から何かを自分のものにしておこうと考える者は一人もいず、万民にとって十分なものがそこにある。

愛なる神は、最高天において御座みざに着くキリストの人性の中にも認められる。「義の太陽」、「世の光」であられるこのお方から、癒しと生命の光線、愛と光の波が遠く宇宙の果てまで流れ出し、すべての聖徒、天使を貫き流れて、ふれるものすべてに瑞々みずしい生命力を与えている。

素晴らしいではありませんか。キリストから今でも光が来ているんです。霊波が、光の波が来ている。全部、それは癒しの光なんです。だから、それを素直に受けとる。我々は太陽の光に当たっても気持ちよくなりますものね。何か清められる気持ちがあります。キリストの光が光線となって我々に来ている、この中に。心に来てくださっているんです。それは御意なんです。イエスキリストはここにそれを求めてやって来られたのですもの。だからもう来ていらっしゃるんです、キリストの光は。

天には西も東も、南も北もなく、一人一人の魂と天使にとってキリストの御座は万物の中央に映る。

また、あらゆる種類の甘美な果実、霊の糧がある。食べているうちに、例えばような香りと飲みが体験できるが、消化してしまつと、辺りの空気を香らせる仄かな芳香が体中の毛穴から立ち昇る。

簡単にいえば、天の万民の意志と願いが神の中に成就しているのである。神の聖目は、どの生命の中にも完まうとされるからである。そのように、天ではどのような条件の下でも、どのような段階にあつても、誰もが至上の歓喜を変わらず体験する。そのように、永



遠の歎びと祝福が義人の結末である。》

●「第七章創造の目的」

それからまたこんなことも書かれています。「第七章創造の目的」の「神を仰ぎ見る」というところです。

《また、わたしはたずねた。「天のもつとも高い領域に住む聖徒たちと天の御使いは、いつも神の御顔^{みかお}を仰ぎ見ているのですか。だとすれば、神はどのような姿形でお現れになっているのでしょうか」

これに対し、天使の一人が答えた。「海が水で満ちているのと同じく、全天は神に満ちているため、天の万民はどこにでも神の臨在を感じる。海に飛び込めば上も下もまわりもすべて水であるように、神の存在も天では同じように感じられる。そして、海の中に無数の生き物が生息しているように、神の無限の存在の中にあまねく生物が存在している。神は無限であられるため、有限な神の子らはキリストの形でしか神をみることはできない。『わたしをみた者は父をみたのである』と主自らいわれた通りである。

この霊の世界においては、個人の霊的生長が神を知り感じることでできる度合いを決める。そして、キリストもまた、一人一人の霊的啓発と理解力に^{まばゆ}応じてその眩い御姿をお示しになる。キリストが、霊界の低く暗い領域に住む者たちに、高き世界の住民に現す同じ栄光をもってお臨みになれば、彼らはそれに耐えることはできないであろう。そのように、主は一人一人の霊魂の生長段階と理解力に応じて、ご出現のときの栄光を加減しておいでである」

それは我々は暗闇から外へ出たら、目がくらくらとしますよね、光が強すぎて。徐々に目が馴れないといけません。そのように魂がキリストの栄光、光に耐えるように高められる度合いによって、キリストの光が強くなっていく。そういうことが書かれています。それから、「天に距離感^{かん}は存在しない」というところです。

わたしは次のようにたずねた。「天のさまざまな存在圏は、互いにどの位の距離があるのでしょうか。他の圏には住めないとしても、訪問する位は許されているのですか」。天使の一人が答えた。「どの霊魂も、本人の霊的生長に^{かな}適った世界に住むよう定められているが、短期間であれば他の圏に行くことはできる。高い存在圏の者たちが低い存在圏に下降する際には、霊的皮膜のようなものが与えられる。それは、彼らの栄光が低く暗い存在圏の住民に混乱を起こさないためである。同じように、低い圏にいる者が高い圏域に行くときにも、その場所の光と輝きに耐えられるよう、一種の霊的皮膜を帯びる。

天では、距離感というものがまったくない。どこかに行こうという意志を固めた途



端に、そこに来ているのだ。距離感があるのは物質界のみである。別な存在圏にいる聖徒に会おうと願えば、本人が一瞬のうちにそこに移るか、相手側が直ちにこちらにくるかの、いずれかである」

これは天界に入ってからのことを書いてますけれども——サンダー・シングもヒルティも言ってます——私は地上でも既に始まっていると思う。地上で始まっているんですよ。ですから、皆さん時々、親しい人のご霊前でサツとその方が現れてきて、ご挨拶に会うという体験をなさることがあるでしょ。そういうことは、この地上でもやはり、我々は霊的存在者なんですよ。霊的存在者がこの肉体をまとっているだけなんです。ところが、時々、霊界が開けたり、霊界の人が現れてきてご挨拶して「これから逝きます」ということがじゅうぶんあると思う。ですから、我々はそのように日頃から霊の神さまの世界と交わりをもつこと——祈りというんですけれども——そういう魂の語らいをしておれば、いろんなものが必要に応じてお示しくださって、

「意気消沈しても大丈夫だよ、大丈夫だ、心配いらんよ」

と、そういう励ましの声が必ず出てきます。時にはご自身を表わしてください、もつと凄いですけれども、まあそこまでは望まないとしても、必ず守られている。他の所にも書いてありました。絶えず主はもう、身に近く周りにも中にもいてくださっているけれども、我々はそれを感じとれないだけで、感じるとしたら、ハートだけだという。知るとか感覚で感じるものではない。霊の眼で、ハートでそれを感じる。それしかない。残念ながら、地上の人間としてはできないんだということも書かれている。だから、それが信じられない。絶えず来ているんです。来ているけれども、それが被^{おお}われて見えないだけなんです。だから、

「見ずして信じる者は幸いなり」

と、キリストは仰いました。肉眼で見える物は限られていますから。絶対次元のものは絶対次元の眼を与えられ、開かれたときに見える。

●「ありがとう」

家内が孫の衡平に、

「衡平ちゃん、こんな状態で長くここに居たら苦しいやろ。おばあちゃんが先に

向こうへ行行って待っていてあげるから、あなたも来ないか?」

と言ったら、

「いや、来ないよ。ここに居る。今、行くのはいや。地上に居りたい」

と言ったそうです。家内が、「先に自分が行って待っていてあげるから来ないか」と言ったけれども、

「いや、地上がいい」

と言ったという。



今ちょっと、衡平の話をしたので——たまたま最近ある文章を発見した——これは1993年12月、衡平が生まれた頃に書いた文章です。私の還暦記念の冊子に掲載された。その意味では、公開されていますので、お読みしてもよろしいと思います。「ありがとう」という題の娘の石田裕美の文章です。

「一九八七年五月一八日、翔しょうが元気に生まれました。「筋肉の病気かも知れないので、訓練を覚えるために、お母さんと一緒に入院してもらいましょう」と、聖ヨゼフ整肢園で言われるまで、何も知らずに暮らしていた七か月間は、なつかしい気もします。先天性筋ジストロフィーという病名をまだ聞かないうちに、ヨゼフに入院して何日目かに、主治医から「足が立てなくても手は使えます。予後は二〇年くらいです。」と、突然言われたときには、頭がボーッとしてしまいましたが、翔は多くの人に愛され、祈られて、主様に守られて、家族の誰よりも明るく、心やさしく、おもしろい子供に育っています。先日、幼稚園のお泊り保育(二泊)で、翔が家にいないと、静かすぎて、親の方が寂しくて困りました。

一九九三年一月三十一日、衡平が元気に生まれました。一か月過ぎた頃、急に具合が悪くなり京大病院に入院。とても元気だったのに、ぐったりして目も閉じたまま、声も出さず、息もほとんどできなくなり、手は冷たくまっ白。器官内挿管をして酸素を送り、小さな体中にモニターと点滴がついていて、抱き上げることもしできない。「できるだけのことはやってみますが、……。」と、先生に言われると、かえって心配になる。炊事場に行くと、他の付き添いのお母さんが温かいおかずを取り分けて「元気出してね」と言っただけで差し出してくれた。まだ話もしたことがないのに。衡平が退院するときその人が、「あなたのあの時のシュンとなっていた顔は忘れられない」と言っていた。私もあの時のあの人のやさしきは忘れない。

一番悪い状態の時、よく父が大学の帰りに寄ってくれた。特別なことを言うわけでもなく、様子をたずねて衡平の顔を見て帰るだけなのに、父が来てくれると不思議と元気が出た。人間の力ではどうにもならない状況の時には、キリストに信頼しきっている人が来ると、こちらまで安心する気がする。母はほとんど毎日来てくれた。あの二人が私の両親で、本当に良かった。病気のことを不幸と思うかどうかは、家族やまわりの人の態度によっても、大きく影響されると思いますが、私はいい人達に囲まれているので、一度もそう思ったことはありませんし、運が悪いとも思ったことはありません。それどころか、私の家族はよほど主様に愛されているように思います。

入院中にいろいろ本を読むことができました。聖書を毎日読んだのは初めてです。独身の頃に一度読んだ覚えのある「讚美の力」は、今読み直すとても楽しくなります。レーナ・マリアさんの考え方にも同感です。神様は病気を治すこと



ができるのに、自分に障害を残しておかれるのは、人間にとって一番大切なのは体の健康よりも、魂の健康であることを明かにするため。そして神様のすばらしい計画のためと彼女は言っています。小池先生が、「人生の目的は主様を讃美すること」とおっしゃったことは何よりうれしかったです。

衡平が再び目を開いて、こちらを見つめてくれた時は、天使に見つめられているような幸せな気持ちになりました。翔と同じ病気で、多分もつと重いだろうと言われていますが、主様の愛に包まれて生きています。私にとっては翔と衡平は世界一すばらしい子供です。私が洗濯物を干していると、自分の服を見つけて、「翔ちゃんの服、洗ってくれたの、ありがとう」。台所で後片付けをしていると、「翔ちゃんのお茶わんを洗ってくれてるの、ありがとう」。私は自分の親にそういうことを感謝したことがないので、翔の言葉に驚きます。

翔と衡平が私の子供に生まれてきてくれて、本当に良かった。子供達と、心にかけて下さる人達と、主様に、心からありがとう。」(奥田昌道先生還暦記念講筵(一) 他証言集、京都キリスト召団、一九九三年二月一九日発行)

ちょうど今年の1月8日に衡平が入院した。それからもうほぼ一か月になります。翔も一時は悪かったけれども、翔はすぐ元気になった。翔の方は誤嚥ごえんがこわい。食物が肺の方へ入る。それを防ぐことが大事なんです。衡平の方はやはり体が翔よりかなり小さい。1月31日の16歳の誕生日を迎えられるだろうか、私も正直こわくなる。でも、本人が、「まだまだこの地上でいたい」

という、その生きる意志をはっきりと表わしている。この子供たちと暮らす空間というのは、まさに地の次元でありながら、天の次元がそこに臨在していると私は感じます。それではなかったらやりきれないですよ。この子供たちがなぜあんなにいつも幸せそうにしているのか。それはやはり天使たちが守っているからだと思う。キリストの命めいを受けた天使たちが守っていてくれる。

そういう子供たちは、肉体の姿においてはまさにこの世で見捨てられた存在です。けれども、あの子たちが生きている次元は天の次元にあります。この地上に置かれている使命がある。その使命を果たしたら、向こうに行かれるのだと思います。翔は今年の5月18日になれば22歳になります。衡平と6歳違いですが、翔はきつと22歳を元気に迎えてくれると思います。翔と衡平が二人並んで本当にいつまでも守りの中で、導きの中でこの世の使命を果していつてほしいなと私は思う。私にとっては、あの子たちがいてくれるお蔭で、この天の次元のことが物凄く力になる。もし、あの子たちと出会っていなかったら、そこまで私は知ることがない。



●「第二の書霊界物語 第一章天からの来訪者」

サンダー・シングの中にこんな話がありました。これも天界でお話を聞いてきたということで、報告している。ある富豪があらゆる物を子供に遺して世を去った。その子供は祝福されて生長し結婚し子供も生まれた。ところが、一夜にして事業が倒産し、奥さんと子供を失った。本当にどん底に落とされる。そこで彼は家出して、祈りのために洞窟に入っていく。いったいこの世は何なのだろうか。ちよつとそこだけご紹介しましょうね。この人がすべてを失ってしまう。

「…さて、この世の儂さは、彼の中に大きな変化を起こさせた。しばらくして、彼は一人の宗教指導者の元に行き、真理を学ぶことに強い興味を示した。しかし、それでも彼のかき乱れた心には、何一つ平和も満ち足りも生まれなかった。そこで、彼は森の奥深くにこもり、洞窟の中に一人住み始め、心を込めて熱心に神に祈り始めた。「ああ、わが造り主、主よ、わたしをこの世から取り去るか、さもなければ、この哀れな罪人を憐れみ、あなたの聖なる現存の輝きを、どうか垣間見させてください。わたしが新しい命を得られるよう」

彼は、くる日もくる日も神を待ち望み、たゆまず祈った。そして、ついに「求める者は見出す」との神の約束により、彼の祈りがきかれるときがきた。

ある朝早く、洞窟の入口に座り、自分の状態について黙想していたとき、一人の人がこちらに向かってくるのをみた。その人をみたとき、多くの思いが湧き起こってきたが、自分にはこついいきかせた。

「きつと、この人もわたしと同じように辛いことを沢山経験し、この世に疲れ、どこかに安らぎの場を求めて森を彷徨さまよっているのだろう。いや、もしかすると、神に完全に帰依した人で、瞑想に忙しくしている人かもしれない。この洞窟はあの人の場所なのかもしれない。いや、道に迷った旅人か、それとも迷い込んだ羊や山羊を追ってきた飼い主だろうか。それにしても、不思議な雰囲気か漂っている」

まもなく、その人は洞窟に近づき、深い愛と憐れみのまなごしをもって、彼に挨拶をした。求道者はすぐに立ち上がり、見知らぬ客のために毛布を広げ、そこに導いた。客が座ると、非常に興味深く、靈感のひだに触れる話が始まった。

求道者「お名前を伺えれば幸いです。なぜ、またどこからここへおいでになったのか」
メルキゼデク「わたしの名前の意味は、あなたにはわかるまい。わたしはあの羊飼いで、失われたわが羊たちを求め救うため、天から降った者である」

求道者は相手の話をよく呑み込めなかったが、メルキゼデクの人柄と言葉は、彼の心に深い印象を与えた。まるで、自分の心と洞窟の薄暗がり、この見知らぬ人の輝かしい現存によって照らされたかのようにであった。そして、彼は、自分が真の羊飼いを必要としている失われた羊のように思えてきた。相手の臨在感に圧倒されたこの求



道者は、メルキゼデクに恭しく問いかけた。

求道者：「あなた様は、そのお仕事を始められてから、どの位になりますか」

メルキゼデク：「世の初めよりこのかた」

求道者：「本当ですか。あなたは預言者のようにお見受けします。どうか、あなたご自身のことをすべてお話しください。わたしを祝福し、どうかお弟子に加えてください」

メルキゼデク：「人類を救うために肉体をまとつてからまだ二千年にもならないが、わたしはそれ以前から存在していた。わたしは永遠、永遠の父である。義と平和の王にして祭司である。わたしのように、王であり祭司たりうる者は一人もない。世の目からみれば、わたしには系図はまったくない。受肉する以前から、わたしはわたしを愛する者すべてに現れた。わたしは彼らを助け祝福し、そして今、あなたの祈りに応え、あなたに平和と安息、永遠の生命を授けるためにきたのだ」

求道者はメルキゼデクの言葉が真実であることを直感し、彼の足下に身を投げ出して叫んだ。

求道者：「ああ、父なる神、わたしはあなたがわが命の造り手であられることを、ついに知りました。わたしはもはや、地上で失ったものを氣にかけません。すべてを得ましたから。今よりわたしはあなたの子供、下僕です。あなたは、この世にあつてわたしのすべてのすべてです。この価値なき哀れな下僕から、なぜ今日の今日までお隠れになりましたか」

メルキゼデク：「確かに、今日までわたしはあなたに自分を現わさずにいた。それはあなたがまだ、この種の啓示に準備できていなかったからである。だが、実際には、わたしは常にあなたとともにいた。そればかりか、人の心と魂におけるわが内なる啓示は、外なる現れよりも不可欠である。

「人の心と魂におけるわが内なる啓示」は——外なる現れ、見える姿で現れるのは啓示ではない——内なるところに現れる。それが大事だと。

あなたが幾つもの不幸を経験したという事実さえ、独特なやり方であなたを準備させたことなのである。真理を追い求める者は、患難辛苦の道具を通してわたしに近づく。こうして、靈魂の能力は、わたしによって聖なる祝福の自覚と歓喜へと奇蹟的に変えられる。人は、患難辛苦により己れの足らざるを知り、己れの必要に目覚め、こうして満ち足りるを求めるに至り、ついには必要なものすべてが、わたしにおいて満たされることを知るのだ」

求道者：「ああ、わたしは何という幸せ者でしょう。たとえ、毛穴のすべてが口になったとしても、あなたへの感謝の気持ちは、いい尽くすことができません。ああ、我が主！わたしはあなたが口先だけの讚美ではなく、真心からの感謝をお求めであること、あなたのお住みになる心は歓びに溢れ、あなたを讚えずにはいられないことも、



今知りました。ああ、わが神、造り主よ、もう一つだけおききたいことがあります。どうか、ご無礼をお赦しください。このようなかげがえのない機会は、この世の合理主義者たちのよくいう主観作用でしかないのでしょうか。わたしは、この啓示は客観的で現実のものと、心から信じています」

メルキゼデク：「子よ、この世の識者のいうことに心悩ましてはならない。彼らのほとんどは神なき利己主義者である。彼らがこれほどまで誤った考えをし、愚者を手引きする愚者と化しているのはこのためなのだ。神のお造りになられた世界はすべて、神の中に、神を通して存在するとはいえ、被造物そのものは神ではなく、神の一部でもない。だが、それは神の存在を離れては存在しえない。これは、被造物が客観的形をもたず、ただの主観にすぎないことを意味するものであるうか。断じて、そのようなことはない。事実、わが民の経験する神との出会い、霊的経験はみな、主観でも想像の所産でもなく、客観的で真実のものである。それは、疑いもなく、彼らがわたしと交わった所産なのだ」

求道者：「ああ、神よ、今日、わたしのいただいたこの祝福が、わたしの弱さや冷淡によって失われたりすることがありませんように。わたしが最後まで忠実であるよう、どうかお恵みください。わたしが常にあなたの真実の下僕であり続け、あなたの中に、あなたのために生きられますように」

メルキゼデク：「常に目を覚まし、祈ることが大切である。世の富を失うとも決して気にかけるな。それは早晩起こることである。だが、今あなたは、自分を失わない限りは他の誰にも奪いとることのできない、真の富を手に行っているのだ。今、あなたは、小船に乗って濁流の上を旅する男のようである。荒れ狂う波風に打たれてこの小船は沈んだ。彼は川岸に向かって泳いだが、ポケットの中の小銭以外、すべての持ち物が濁流に押し流された。男は川岸に着くと、賊に襲われ、持っているものすべてを奪われた。こうしてすべてを奪われても、男は決して取り乱さなかった。それは、誰にも奪い取ることのできない、あの真の平和が心の中にあつたからである。そこで彼は讚美歌をつたいながら神を讚え、そこを去って定められた務めに着手した。

今、あなたは、この世の富と名誉を失うことによって心が空にされ、真の永遠の富を受けるに至ったことに感謝せよ。みよ、わたしはいつまでもあなたと共にいる。行って、わが羊たちを牧しなさい」

真理の探求者は、^{うつや}恭しく頭を下げ、メルキゼデクの足下に身を投げ出し、メルキゼデクは彼を祝福すると姿をかき消した。彼は起き上がり、全身全霊をもって神に仕えた。》

こんなお話ですね。「メルキゼデク」はアブラハムのところに出てくるでしょ(創世記14・18)。(20)。へブル書にも出てきます。



「³父なく、母なく、系図なく、^{よわい}齡の始なく、^{いのち}生命の終なく、神の子の如くに
して限りなく祭司たり。」(ヘブル7・3)

「アブラハムは恭しく十分の一を献げた」という話が出てきます。「メルキゼデク」という
名前で、キリストがこの求道者に語りかけておられる。

「何でもつと早く現れてくださらなかつたんですか?」

「いや、お前の準備ができるまでは、私は姿を隠していた。艱難辛苦を通して準備
ができるんだ。だから、どんなことも決してマイナスではない。すべてがプラス
になるんだよ」

と。ローマ書8章でパウロが、

「²⁶……我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御霊みずから言い難き^{なげき}歎
もて^{とりな}執成し給う。……²⁸神を愛する者、すなわち御旨によりて召されたる者
の為には、凡てのこと相働きて益となるを我らは知る。」(ロマ8・26～28)

と言っています。これは全部、サンダー・シングの本に実証されています。「二千年前から私
はこの仕事をやっているんだ」と、キリストは言っておられる。

「世の初めよりこのかた、受肉する前からやっている」

と言っている。そういう天の次元、この角度からヨハネ伝を読みましようということですが、
私が申し上げているのは。決して理性的な次元だけで、地の次元だけで読もうとしたらだ
めです。そのことは3章にはつきり出てきます。

「³¹上より来るものは凡ての物の上であり、地より出づるものは地の者にして、

その語ることも地の事なり。」(ヨハネ3・31)

ということが書かれていますし、

「¹⁷神その子を世に遣したまえるは、世を審かん為にあらず、彼によりて世の
救われん為なり。……¹⁹その審判は是なり。光、世にきたりしに、人その
行為の悪^あしきによりて、光よりも暗黒^{くらき}を愛したり。」(ヨハネ3・17～19)

神がキリストを世にお遣わしになつたのは審くためではない。救うためである。けれども、
人は自分の行為が悪いために光を憎み、闇の中に自分を追い込んでいく。それが既に審判
になっている。そういうことも書かれていますよ。

今日は、サンダー・シングを紹介しましたが、そういう角度から、天の次元が、神さま
の御思いがきて見守る。

「信ずる者には永遠の生命を与える」

と言われた。もう皆さん、永遠の生命が来ているんですよ、来ているんですよ。御業
はもう終わったんです、十字架は終わった。復活も終わった。もう溢れるばかりに、シャ
ワーのように聖霊の波が来ているんですよ。だから、それを受けとっていく。我々ができ
るのは、



「ありがとうございます！ 主さま、いつもあなたと一緒にいらせてください。私の魂は、あなたが消え去ったら、まことに空しくなります、さびしくなります。あなたを失ったら、生きてはいけません」

という、そういうふうな心の叫びが皆さんの中に宿っていらつしやる。もうあなたは神の子なんです。目が開かれつつあるんです。だから、疑わないで、「見ずして信ずる者は幸いなり」と。ヨハネ伝が書かれた目的は、永遠の生命を与えるためである。そういう角度からヨハネ伝をこれから皆さんと楽しく読んでいきたいと思っています。

● 祈り

では、一言お祈りして、終わりいたします。

主イエス・キリストさま、父なるおん神さま。ありがとうございます。ヒルティを終わってヨハネ伝に入りましたが、このようにたくさんの方々があなただけを慕ってここに集つどってくださいました。主さま、ここにおいでになった方々は、あなたの見えない糸によって導かれ、あなたによってここに連れて来られた方々ばかりです。

そして今日、ヨハネの福音書をおし、サンダー・シングのビジョンをおして、あなたは本当に奥義を開示してくださいました。主よ、ありがとうございます。あなたはいつも私たちと一緒にいて、私たちのうちにあり、また私たちもあなたの中にあり、こうして永遠にあなたと結ばれて、この地上を旅してまいります。

どんなにこの地上が困難に満ちていまして、また失うものがいろいろございまして、あなたは奪われないもの、永遠なるものを既に与えてくださいました。そして、あなたを求めていく者に、

「すべて必要なものは添えて与えられる。明日のことを思い煩わなくていい。明日のことは明日自身が思い煩うから。私が一緒に荷物を負うからね」

と、あなたは私たちに呼びかけていてくださいます。

あなたは人となって現れてくださいましたから、人としての苦しみを味わってくださいました。だから、私たちの弱さを思いやつてくださいることができます。そのあなたであるからこそ、私たちは安んじて、「主よ」と呼びかけ、「御手にわが魂を委ねます」と申し上げることができず。どうぞ、ここに集われたお一人お一人をみなあなたの子供として、神の子として、その栄光をいただき、神の子らしくあなたに相応しく歩んでいくことができますように、日々にあなたが導いてくださいますように、希こいねがい奉ります。

一切の垣根はございません。一切の宗教的な対立もございませぬ。あなたは輝く霊界で輝いておられますから、その光を浴びて、私たちもそれに与あずかるだけです。

主イエス・キリストの尊い御名によってこの感謝と讚美と祈りを御前にお献けんげいたします。アーメン。

